



今日のキーワード 米中対立、『5G』技術で先行する中国、追う米国

米中対立は今やメディアで取り上げられない日がないくらいに激化しています。このところ米側のハイテク分野での対中強硬姿勢が目立っていますが、これは中国の技術開発の早さに対する米側の警戒心の表れだと考えられます。本稿では、中国の台頭が目立ってきている技術分野に焦点を当て、シリーズとして現在の米中の開発状況を確認してみます。1回目となる今回は、「次世代通信規格（『5G』）」です。

ポイント 『5G』技術・通信基地では中国優勢

- 高速、低遅延性、多数同時接続を特徴とする『5G』の本格的な普及が見込まれており、各国は実用化を進めています。『5G』の主導権を巡り米中の対立は激しさを増していますが、政府・企業間の調整等が難しい米国に比べ、国策として『5G』を進める中国が優勢な状況になっています。2020年末の世界の『5G』対応携帯の販売台数では、中国のシェアが80%強と見込まれており、突出しています。

【米国と中国の『5G』普及状況等の比較】

	米国	中国
5Gの普及状況	極めて限定的な利用状況。 BofAの推定では、2020年の5Gスマホ販売台数は17百万台。	スマホ販売台数のうち、約60%強が5G対応。 BofAの推定では、2020年の5Gスマホ販売台数は192百万台。
主要なハンドセットメーカー	1位はサムスン。その他はLG、モトローラ等	1位はファーウェイ。その他はサムスン、シャオミ、ヒボ、ZTE等
主要な通信機器メーカー	ノキア、エリクソン	ファーウェイ、ZTE、エリクソン等
主要な半導体メーカー	クアルコム（製造は台湾のTSMC、サムスン） ザイリンクス（5G基地局用）	ファーウェイ（製造は子会社のハイシリコン、TSMC、メディアテック）

(注) BofAは、Bank of America Corporation。
(出所) 各種資料から、三井住友DSアセットマネジメント作成

今後の展開

技術やインフラで先行する中国『5G』だが、半導体供給網の確立が課題

- 世界のトップを走っているといわれる中国『5G』ですが技術的には開発途上であり、主要な技術のうち、ハンドセットや通信機器向けに必要なとされる最先端のプロセス技術を用いた半導体については、外部調達しているのが現状です。しかし、外部調達先であるTSMCは、米国の対中制裁によって中国『5G』の中心企業であるファーウェイ向けの半導体供給を停止しており、ファーウェイ製品の競争力低下が予想されます。
- ファーウェイは、『5G』ではハンドセット・基地局向け機器でも世界のトップメーカーであり、同社の成長減速は中国『5G』開発の減速に直結する恐れがあります。国内外からの優秀な人材の確保により、どの程度の期間で供給網を確立できるかがポイントとなりそうです。

※個別銘柄に言及していますが、当該銘柄を推奨するものではありません。

ここもチェック!

2020年9月16日 中国経済は出遅れていた消費が前年比プラスに
2020年8月27日 『米中対立』は大統領選をにらみ一段と激化

■当資料は、情報提供を目的として、三井住友DSアセットマネジメントが作成したものです。特定の投資信託、生命保険、株式、債券等の売買を推奨・勧誘するものではありません。■当資料に基づいて取られた投資行動の結果については、当社は責任を負いません。■当資料の内容は作成基準日現在のものであり、将来予告なく変更されることがあります。■当資料に市場環境等についてのデータ・分析等が含まれる場合、それらは過去の実績及び将来の予想であり、今後の市場環境等を保証するものではありません。■当資料は当社が信頼性が高いと判断した情報等に基づき作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。■当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらの知的所有権その他の一切の権利は、その発行者および許諾者に帰属します。■当資料に掲載されている写真がある場合、写真はイメージであり、本文とは関係ない場合があります。